

高射砲のあった街で 「語り継ぐ会」で話したいこと

中富町 徳升悦子

私が生まれた年は昭和15年(1940年)。紀元(皇紀)2600年、国民が祝賀に浮かれていた。一方大陸では、日中戦争が全面戦争へと突入した時代であった。

両親は昭和17年(1942年)、板橋の仲宿から新興住宅地の常盤台へ移った。3歳の頃、近くの麦畑で迷子になったことが、いまだ記憶の中にある。

昭和16年(1941年)12月8日、真珠湾攻撃。まさに戦争時代に幼少期を過ごした。在郷軍人であった父が掘った防空壕は、隣組4軒分の避難用。中に入って遊び、よく叱られた。

常盤台4丁目に高射砲があった。19年前後から、そこを標的にB29爆撃機が飛来し、一日に何回も空襲警報が鳴り響いた。防空頭巾を被って大きく頑丈な10数軒用の防空壕へ母に手を引っ張られ駆け込んだ。穴が揺れ大人も子どもも身を震わせながら解除を待った。

食料も手に入り難くなり父が務めていた戦闘機の軍需工場へお弁当を届け、帰りには食料になるハコベ・アカザなど種々の野草を夢中で摘んだ。米軍の爆撃がさらに激しくなり、野草を摘んだ帰りに低空で飛来したB29に、私を下に抱いて夢中で身を伏せたことを後で母が話していた。

池袋方面の空が真っ赤に染まっていく様子を父の肩車で見ていたことも忘れられない。

そして8月15日昼、隣組の人たちが我が家に集まってきた。ラジオを前にして居住まいを正し、玉音放送の流れに次第にうなだれていく異様な姿は、5歳の私の脳裏に焼きついている。

今年の正月、40年ぶりに我が家の在った板橋区常盤台の街を歩いた。戦前大田区田園調布を模して造成されたという街だが、その骨格を残してはいるものの当時の面影はなくなっていた。私は駅前ロータリーを放射状に伸びている道路を上板橋方面に向かって5~6分の我が家のあった3丁目へと歩いた。

我が家の場所、防空壕の場所、B29を避けて母と伏せた道路、一面の麦畑などなど、幼少期の出来事を思

い浮かべながらひととおりに歩き回った。

それから高射砲のあった4丁目へ向かった。その広大な敷地は板橋区平和祈念公園となっていた。広い公園内には、平和都市宣言、平和祈念パネルが立ち、区内の戦跡などが図示されていた。

さらに、1992年建立された花崗岩の広島型平和の灯モニュメントには、アーチの天辺にヒロシマの「平和の灯」とナガサキの「誓いの灯」が灯されている。思わず頭を下げた。思いを残しながら、私は常盤台駅へと戻った。

昨年の調査では、5歳以上の戦争体験者が約14%とか。語り部がいなくなるのも、時間の問題になりつつある。

今、世界はテロや戦争の連鎖の中にある。紛争解決の手段としての武力の行使がいかに悲惨かは語るべくもない。だからこそ、「憲法9条」は、日本の宝、世界の宝なのだ。守らねばならない。

戦跡めぐりの感想から

◆ 日ごろ通っている入西(小山や善能寺、新堀)に多くの戦跡があり驚いた。

また、小山の皆さんが三角兵舎の杉材を燃料として使わずに公民館を立てる材料としたことは、素晴らしいことだと思う。小山の住民の皆さんにも伝えたい。(平瀬敬久)

◆ 道端の目にとまらないような小さな祠に、こんな物語が秘められていたとは知らなかった。

(広沢)

◆ 毎回新たな発見があります。70年前の戦跡なので忘れられようとしています。戦跡めぐりをぜひ続けていただきたいと思います。(新井文雄)

◆ 大変興味深く楽しく参加できました。(白鳥 昌)

◆ 準備が大変だったと思います。大変勉強になりました。ありがとうございました。(信 寛良)



戦争を語り継ぐ 子や孫の時代へ

日時 12月11日(日曜日)13時30分から16時

会場 坂戸駅前集会施設(2階)

内容 高射砲のあった街で 徳升悦子さん

9条への思いや話し合い、平和のうたなど

- ◆ 坂戸の戦跡めぐりで、戦跡の現地を史実として回らせていただいた。かつて越生へ疎開をしていたと聞いていたが豊かな都市として見ていた。

戦争末期の住民・兵隊等の苦労は計り知れないほどで、愚かな戦争だったとあらためて考えさせられた。戦争の悲惨さは、二度と起こしてはならない。

「平和都市宣言」を制定しているのだから、私たち一人ひとりが憲法を守ることを自覚していきたい。

大久保さんに、大変感謝いたします。(高橋明子)

- ◆ 今回の参加で2回目になります。身近なところに、人知れず戦跡が、形として残っていることに感動しました。

語り継ぐことの大切さを痛感します。(高橋 章)

- ◆ 事前の準備も心を込めてやったださり、参加者一同担当の大久保さんに感謝です。

今まで飛行場を中心に学んでいたのですが、入西のほうにもそれに関わる場所があったことをあらためて知り感動でした。(新井竹子)

- ◆ 戦争の傷跡を、色々見て歩いて感じました。戦争に参加して死を覚悟してはいずり回っていたということですよ！ 大人と幼稚園児の戦いみたいなこともやってたんですね！

私は戦後生まれですけど、幸福だと思います。戦争は、二度とやるべきではありません。

- ◆ 坂戸という、一見平和な町の奥の深さを知りました。また、説明者の含羞の深さが教えてくれる歴史・文化(遺跡)等の面白さも伝えてくれた良い戦跡めぐりでした。

原爆投下 71年目の真実(2)

末広町 石川裕一

正当性 大きく揺らぐ

前号で報告したように、71年経った現在でもアメリカ社会では「原爆投下は戦争を早く終わらせ多くの命を救ったのだ」が大義として、原爆投下が支持されてきました。

しかし、保管されていた多くの資料を調査した結果、この大義・正当性を根本から揺るがす事実が明らかになったのです。

空軍幹部を養成する士官学校の図書館に、軍の計画の全てを知る最高責任者だったレスリー・グローブス准将の未公開のインタビューテープが保管されていました。軍は正確な歴史を記録しようと、1970年4月3日、2時間かけて聞き取り調査を行っていたのです(グローブスはこの3ヵ月後に心臓病が悪化して死去)。

彼はインタビューの中で、原爆投下の経緯を赤裸々に語っています。「大統領は市民の上に原爆を落とすという軍の計画を止められなかった。いったん始まった軍の計画は止められる筈がない」。

世界初の原爆に向け

当時のルーズベルト大統領が極秘に始めた原爆開発(マンハッタン計画)で、1942年9月、グローブスはこの計画の責任者に抜擢されました。全米屈指の科学者を集めた研究所と工場を建設し、22億ドルの国家予算を注ぎ込んで、世界初の原子爆弾の完成を目指しました。

ところが、1945年4月、ルーズベルトが急死し、その直後副大統領だったトルーマンが大統領に就任します。ルーズベルトから何の引き継ぎもないまま、トルーマンが巨大な国家プロジェクトの責任者になったのです。

就任当時のトルーマンについて、グローバルは「トルーマンは何も知らずに大統領になった。原爆の投下を判断するという恐ろしい立場に立たされたのだ」と語っています。

政府と軍の攻防

原爆計画を仕切るグローブス、そして最終的に責任を負うことになったトルーマン、この後どのような意思決定を経て、原爆が投下されたのか。様々な資料を詳細に検証した結果、投下までの4ヵ月間、政府と軍の間で知られざる攻防があったことがわかってきました。

アメリカでは、選挙で国民から選ばれた大統領が、「最高司令官」として軍の計画も統制するという「文民統制」という仕組みになっています。重要な軍の計画は、必ず大統領に報告し、承認を得ることになっていました。

トルーマンが就任後の4月13日、グローブスは計画の進捗状況を初めて説明し、計画続行を認めてもらおうと大統領執務室を訪れていました。

これまで原爆をどこに落とすかなど、詳細な報告はなされていませんでした。グローブスが持参した報告書には、「原爆の仕組み・燃料の種類・予算」などが記されていました。(次号に続く)

運営ピンチ!カンパのお願い

九条の会さかどでは、運営に関わる経費をカンパによって賄っています。会場カンパと個人カンパです。創立時からの収入累計は577,245円です。

皆さんで集まれば会場費や資料代、毎月のニュースには印刷代や郵送料、講師を呼べば諸経費がかかります。支出累計は565,991円で、差引残高11,254円です。

収入のほうが多かった年、支出のほうが多かった年とバラつきはありますが、ここ数年は支出が超過気味であり、今年に限れば既に25,000円ほど赤字です。

ここ数年の参加者の減少で、かなり厳しい状況です。

運営委員会では、今後についてもカンパで賄うことにしましたが、集まった時に呼びかけるだけでは限界があり、集いには参加できなくても応援したい人はいるはずと、カンパを呼びかけることにしました。

九条の会さかどの活動を、カンパを通じても応援したいとお思いの皆さま、カンパをお待ちしております。

[郵便振替口座]

- ・加入者名 小林忠夫
- ・口座番号 00570-1-7977
- ・通信欄に「九条カンパ」とご記入ください。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

12月22日、1月26日、2月23日(第4木曜日10時~12時)北坂戸駅東口を背にして、駅前ロータリーの正面左側、北坂戸にぎわいサロン(坂戸市と城西大学との連携)で。